伊曽乃神社

西条の大祭り

吉本　勝

●――特集
道前平野の歴史と文化

西条っ子の自慢は一にお祭り、二に「打ち抜き」、三に石鎚山である。

お祭りは、人口六万人足らずの町なのに、十月十四日から十七日まで四日間行われる。氷見の氏神・石岡神社（だんじり二十七台・みこし二台）から始まり、神戸の伊曽乃神社（だんじり七十七台・みこし四台）、玉津下島山の飯積神社（太鼓台十台）の順である。各地区それぞれに「出し物」に特徴があり、何と言っても、その数の多いのが自慢である。

だんじりの起源は、平安の昔、全国的に悪疫が蔓延したとき、京都八坂神社で全国六十六ヶ国・六十六本の鉾を立て、これを担いで神泉苑に行き、平癒を祈願したのが始まりであり、祇園祭の山鉾の起こりでもあるともいう。

一方、西条では、石岡神社の伝承に、「昔吉祥寺の住職が河内国の誉田八幡宮の山車を見て帰り、これに似せた物を造らせたのが、石岡神社の一番だんじりである」との話がある。『西條市誌』によると、寛延三年（一七五〇）以前より登場していたことは間違いなさそうだ。

天保十三年（一八四二）、西条松平家九代藩主頼学の命により編述された『西條誌』（西條藩七十ヶ村の郷土誌）には「石岡神社　台尻十六台」・「伊曽乃神社　台尻並御輿太

伊曽乃神社。10月15日宮出し。4：00頃。だんじり・御輿（みこし）80台が境内に集まる。

鼓合二十三台、内十九台尻、四御輿太鼓」とあり、飯積神社にはまだ太鼓台奉納の記述がない。

西条祭でだんじり、みこしの数の一番多い伊曽乃神社（式内大社・旧国幣中社）のお祭りを紹介する。

十五日。午前一時には伊曽乃神社氏子は目を醒ます。各町内のだんじり広場にぞくぞくと青年、壮年が三つ揃（祭衣裳）にハッピ姿で集まる。三段の高欄に取付けた丸型・なつめ型の提灯百個余りにローソクが灯る。総代の挨拶、運行上の注意があり、午前二時いよいよ伊曽乃の杜へと「宮出し」に出発。太鼓・鉦・伊勢音頭に合わせてだんじりは生き物のように躍動しながら加茂川橋を渡る、西土堤一ぱいにだんじりが行列するさまは壮観で、闇のなかに提灯の灯でだんじりの姿が浮かび上がった景観は夢の国に居るような気持ちになる。よくぞ西条に生まれ育ったと喜びを味わう一時である。

大鳥居をくぐり境内に入る。坂道石段をものともせず一気に担き上げ神門前へと進む、神門前では、次から次とだんじりが、神殿に向かって掛声も勇ましく差し上げなど見事な担きぶりを披露する。

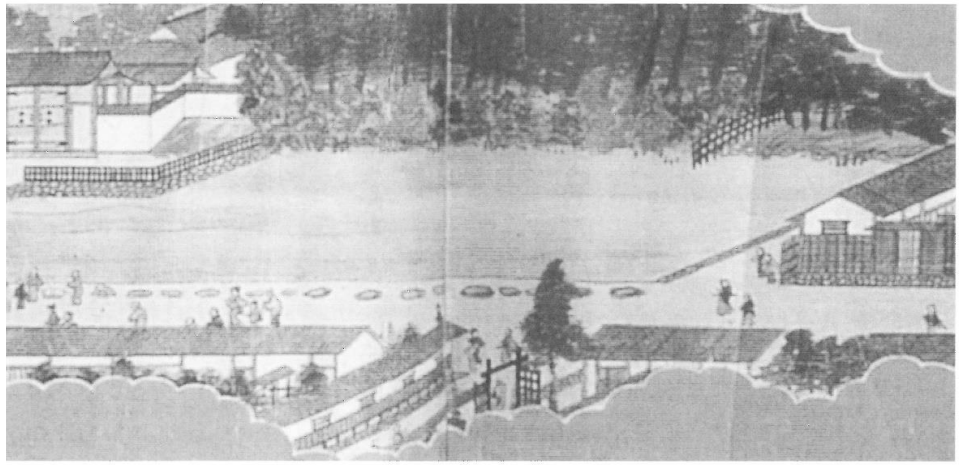
神殿では厳かに、御神体を御神輿にお移しする儀式が、すべての明りを消して行われる。

午前六時。煙火を合図に神輿が出御し二日間の渡御行列が始まる。各だんじり・みこしは神輿をお見送りした後、自町内へ帰る。

十六日。一年間待ちに待った日がやって来た。昨日神戸、神拝の町内を渡御した神輿は大町常心の御旅所で仮泊して、今日は大町、西条、玉津の町内の渡御を行う。

前日の疲れもみせず、青年達は時計の日付が変わるのを待って御旅所

伊曽乃神社御旅所の宮出し。10月16日。3：00頃再び、だんじり・御輿が集まる。



御殿前御神楽風景。伊曽乃大社祭礼絵巻（天保期）

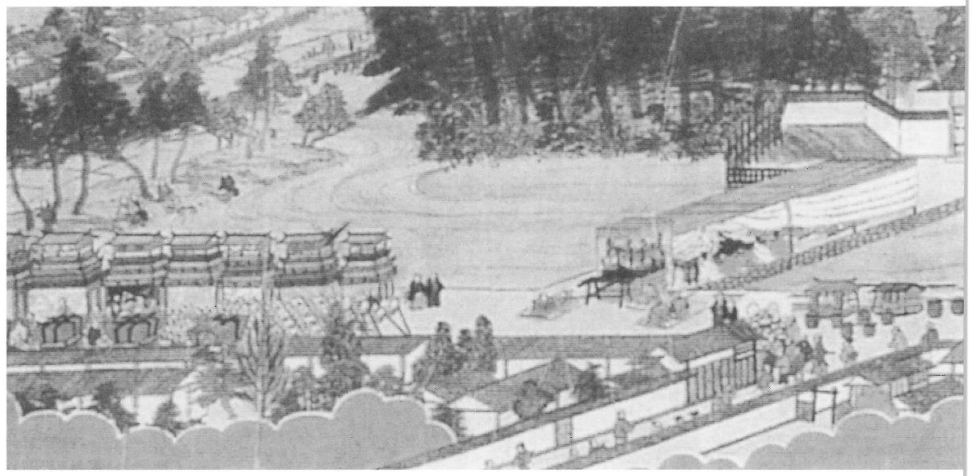
の「宮出し」の準備にかかる。午前一時にはだんじりの提灯に灯を入れ、人寄せの太鼓を叩く。午後二時、出発式を行い隣町内のだんじりを誘い合わせ御旅所に向かう。仮殿の前ではだんじりを上下に乱舞して神さんに朝の挨拶をし、与えられた時間一ぱい差し上げ練り合い担き比べをして番号順に据える。この間に見物人が増えこの見事な提灯を付けた美しい祭りを見ようと集まり、場内は人・人で一ぱいになる。だんじりの練りが終わる頃、数百個の提灯を付けたみこしが威勢よく走り込む、四台揃っての走り込み練りで提灯はしだれ柳のように揺れる。この「宮出し」と「宮入り（川入り）」は共に伊曽乃祭りの一大絵巻である。

東の空が明るくなる午前五時、中野一番だんじりが渡御の魁として出発。続いて番号順に神戸・大町・神拝・玉津・西条各地区のだんじりが列を正して出て行く。大町・西条の町内を通って御殿前（旧西條藩陣屋跡・現西条高校）に午前七時頃、一番だんじりが姿を見せる。ここ御殿前では提灯を外しただんじりの担き比べ、練り合いは、水の都西条のお堀に映るだんじり・みこしの姿はまた美しい。

天保八年（一八二七）に書かれた『雨夜の伽草・西條花見車』に御殿前の御神楽の様子を下記のように表現している。

「（前略）以上の行列にて御城下を渡し奉るは結構目を驚かし魂を消す思いなり。御城門の前には浅黄、綸子、紫縮緬、緋緞子の幕を張り大守御座、後に家中諸士雲の如くかすみの如く居並ぶ中、楽車、御輿楽車次第乱さず御堀端に居並び、其の中神輿進み御仮家に居奉る。祢宜管弦を奏し、八乙女白妙の袖を翻し舞い、大宮司小神司祝詞を誦み幣帛を捧ぐ様はまさに空飛ぶ鳥、地を走る獣も静まり数万の人亦夢の如くなり。」

神輿行列が御殿前に到着するとだんじりが入れ替わりに出発する。氏子の東の端の玉津にだんじりが並ぶのは昼頃になる。ここより明神木・沢町内を通って宮入りの加茂川に向かう。川入りの神戸のだんじりは川原へ、他のだんじりは東土堤に整列して神輿の禊の川入りを待つ。間も



加茂川。16日17：00頃
渡御行列を終えて、宮入り。
川入りのだんじりと、土堤で
神輿を見送るだんじり群

なく神輿は石鎚山を源とした加茂川の清流に入る。待ち構えていただんじり群が神輿めがけてなだれ込む、担夫は腰まで水につかりながら神輿とだんじりが練り合う。神輿は夕陽を浴びてこがねいろに輝く。この宮入りは伊曽乃祭のクライマックスで両岸を埋め尽くした数万の観衆が酔いしれて拍手が起こる。神輿は全だんじり・みこしに見送られ行列を整え本宮に還御する。見送っただんじりは提灯に灯を入れ、自町内へ太鼓に合わせ伊勢音頭を歌いながら元気よく帰って行く。

神輿の渡御行列の行程は二日間で五一km。だんじり、みこしの十六日の統一行動の行程は一三kmにも及ぶ。

平成五年。神輿を中心とした、だんじり、みこしの統一行動の祭りが市の文化財に指定された。

よしもと・まさる　一九三一年長崎県佐世保市に生まれる。明年一九三二年より愛媛県西条市に在住。旧制西条中学中退後、建築大工に弟子入り。二級建築士・一級建築大工技能士。現在、西條史談会事務局長。平成十年「西條のおまつり」を自費出版する。